

Maloryのアーサー王物語の誓い--「ペンテコステの誓い」から「偽誓」まで

竹中, 肇子

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

103

(発行年 / Year)

2010-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007101>

Malory のアーサー王物語の誓い

——「ペンテコステの誓い」から「偽誓」まで——

竹 中 肇 子

1. はじめに

誓いには人を束縛する力がある。誓うということは、契約するということであるが、聴衆の前でその文言を発話して初めてその効力を発揮する。日本でも欧米社会でも、裁判で証言する際に誓うが、宣誓は起立して厳粛に行われ、偽りを述べないことを誓う。日本と意識の違いを感じるのは、欧米ではでは政府の役職に就く場合にも宣誓式を行う点である。誓いが復唱されるのは、その文言を間違えることは許されないからに他ならず、間違えた瞬間に誓いはその効力を失う。誓いが法的拘束力を持つという欧米社会特有の価値観は、サー・トマス・マロリー (Sir Thomas Malory) の『アーサー王の死』 (*Le Morte Darthur*, 1485 年) の中にも見出すことができる。本論では、マロリーのアーサー王物語における「誓言」を検証し、その上で、誓いの言葉がマロリーの物語に影響を与えた可能性についても示唆したい。

2. 「ペンテコステの誓い」、「四福音書の著者」及び「聖書」に言及した誓い

マロリーの物語には「誓言」が数多く描かれているが、「誓言」とは誓いの場で神の名や神聖なものに宣誓する形式を借りるレトリックである。誓いを扱った先行研究には、チョーサーの Tabard の主人の「誓言」¹やマロリーにおける performative language の研究がある。² 本章では「誓って (by my faith)」や「神にかけて (by God)」等は除外し、まず、円卓の騎士たちの誓いであり物語に深く関わっている「ペンテコステの誓い」について考察する。次に、「ペンテコステ」

と同様にキリスト教の聖なる言葉である「四福音書の著者」及び「聖書」の名を語って宣誓する「誓言」について論じたい。³

2.1 「ペンテコステの誓い (The Pentecostal Oath)」

マロリーの物語に描かれている誓いの場面を考察する時に、まず思い浮かぶのは「ペンテコステの誓い」(the Pentecostal Oath)である。⁴ ペンテコステ(聖霊降臨祭)はホイットサンデー(Whitsunday 白衣の日曜日)とも呼ばれるが、クリスマスやイースター(復活祭)と並ぶキリスト教の三大祝祭日のひとつである。新約聖書の『使徒行伝』第二章一節～四十二節にその具体的記述がみられる。復活したイエスが弟子たちに「近いうちに聖霊が降る」ことを告げて天に上っていく。皆が集まり祈りを捧げて待っていると、突然、激しい風のような音が天から聞こえた。また、舌のようなものが、炎のように分かれて現れ、ひとりひとりの上にとどまった。使徒たちは聖霊に満たされ、さまざまな国の言葉で語り始めた。ペトロが中心になってイエスの死と復活の意味について語ると、多くの人が洗礼を受けて仲間に加わった。その数およそ3千人であったというものである。

マロリーの物語の「ペンテコステの誓い」とは、毎年聖霊降臨祭に騎士たちが宮廷に集い、同じ誓いを口にすることである。この場面はマロリーの作品の第一編第三章の最終場面に描かれている。

than the kynge stablysshed all the knyghtes and gaff them rychesse and londys; and charged them never to do outeraige nothir mourthir, and allwayes to fle treson, and to gyff mercy unto hym that askith mercy, uppon payne of forfiture [of their] worship and lordship of kynge Arthure for evirmore; and allwayes to do ladyes, damesels, and jantilwomen and wydowes [socour:] strengthe hem in hir ryghtes, and never to enforce them, uppon payne of dethe. Also, that no man take no batayles in a wrongefull quarell for no love ne for no worldis goodis. So unto thys were all knyghtis sworne of the Table Rounde, both olde and yonge, and every yere so were the[y] sworne **at the hyghe feste of Pentecoste.** (*Works* 120 ll.15-27.下線筆者)

円卓の騎士たちは、聖霊降臨祭の大祝宴の席で毎年「決して暴虐を働いたり人

を殺したりせぬこと、常に裏切りを避け、慈悲を求めるものには与え、守らねば王の信頼と庇護とを失うこと、常に、夫人、乙女、侍女、寡婦のために尽くし、その権利を守り、決して無理強いしないこと、違反すれば死刑だということ。また、義理づくでも金づくでも、正当な理由をなくして決して戦わぬこと（上記引用、下線部分）」という文言を口にすることでその結束力を維持した。またこの場面は、マロリーの作品全体における誓いの定義を我々に認知させる機能も備えている。「ペンテコステの誓い」に違反した場合は、死でもって償うのである。この円卓の騎士たちの誓いが Pentecost という言葉と結びついた意味は大きい。岩波敦子氏は『誓いの精神史』の中で、誓いの強制力について論じている。誓いを破ることは社会集団から排除され、追放を意味した。また、キリスト教の影響により誓いの聖性がより高められた時代でもあった。⁵ Pentecost を冠する「ペンテコステの誓い」は、王国の社会秩序を守るための「憲章」なのである。

2.2 「四福音書の著者にかけて (upon the four Evangelistes)」

マロリーの物語の三か所に「四福音書の著者にかけて (upon the four Evangelistes)」という「誓言」が用いられている。以下、それぞれの事例に①～③と記号を付した。Evangelists とは福音書の著者のことであり、イエス・キリストの言行録である福音書はその存在そのものが神聖であるから、誓いにより効力を与えることができる。以下、「四福音書の著者にかけて」という「誓言」が物語にどのように用いられているのか分析する。

「ユーザー・ペンドラゴン王の誓言」

Evangelists に言及した「誓言」の最初の事例はマーリンとユーザー王のやり取りの中にみられる。⁶ ティンタジェル公夫人イグレインに横恋慕したイングランドの王ユーザー・ペンドラゴンは、夫人を自分のものにしようとティンタジェル公に戦いを仕掛ける。両陣営とも激しい戦いを繰り広げ多数の死者を出す。怒りと激しい恋心のため王は病気になってしまうが、そこにマーリンが登場する。マーリンは王に、「もし聖別された真の王らしく私の望み通りにすると誓ってくだされば、お望みをかなえてさしあげましょう」と王に誓いを促す。このマーリンの言葉の中に「聖別された真の王」という表現があることに注目したい。この場合の「聖別」とは、キリスト教国の戴冠式の際、高い身分の司教が新王の頭に

聖油を注いで神へ誓わせることを意味している。ユーザーは神が認めた王ということになる。

“So ye wil be sworn unto me, as ye be a true kynge enoynted, to fulfille my desyre, ye shal have your desyre.” (*Works* 8 ll.37-39.下線・太字筆者)

王は、マーリンの「聖別された王」という言葉に応えるように「四福音書の著者にかけて」という「誓言」を用いて約束を守ることを誓うのである（下記①太字部分）。

① Thenne the kyng was sworne **upon the four Evangelistes**. (*Works* 8 l.40. 太字筆者)

王は、四福音書の著者にかけて「誓言」を行うことによって誓いに信憑性を付与し、マーリンに確かな保証を示したのである。マーリンは王の約束を取り付けた後に、助言を与える。そして王は念願かなってイグレインと結ばれ、アーサーが誕生するのである（*Works* 9 ll.16-24.）。この王の誓いは物語の発端でもあり、これによってアーサー王の物語の幕が開くのである。

「サー・ガウェインの誓言」

二つ目は、サー・ガウェインの「誓言」である。第一編第三章で、マーリンは王に「ガウェインに冒険の話をするよう誓わせるように」と勧める（下記引用文、下線部前半）。

And anone as he was com Merlion dud make kynge Arthure that sir Gawayne was sworne to telle of hys aduerture, and how he slew the lady, and how he wolde gyff no mercy unto the knight, wherethorow the lady was slayne. (*Works* 108 ll.25-29. 下線筆者)

その冒険の話とは、「ガウェインが騎士への慈悲を拒んだことと、そのために婦人を殺してしまったこと」である（上記引用文、下線部後半）。このガウェイ

ンの冒険談に王と王妃は激しい不快感を示す。そしてガウェインには「生涯婦人たちの味方となり婦人のために戦うこと、常に礼儀正しく慈悲を請うものには決して拒んではない」という判決が言い渡される。これは、前述の「ペンテマステの誓い」に繋がる判決である。ガウェインは「ある婦人のために戦い、相手が別の婦人のために戦う以外は、決してどの階級のご婦人たちにも逆らわぬ（下記引用②、下線部分）」と「四福音書の著者にかけて（下記②、太字部分）」誓うのである。

② Thus was sir Gawayne sworne **upon the foure Evaungelystis** that he sholde never be ayenste lady ne jantillwoman but if he fight for a lady and hys adversary fyghtith for another. (*Works* 109 ll.1-3. 下線・太字筆者)

この「サー・ガウェインの誓言」の後にはコロフォンが続き、ガウェインの冒険談がここで一区切りついたことを示している。

AND THUS ENDITH THE ADVENTURE OF SIR GAWAYNE THAT HE DUD AT THE MARIAGE OF ARTHURE. (*Works* 109 ll.4-5.)

このコロフォンの後、物語はサー・トーの冒険談へと移行するのである。

「ペリノー王の誓言」

三つ目はペリノー王の「誓言」である。彼は冒険の途中で乙女に助けを求められるが、命を助けないまま行ってしまふ。冒険に夢中だったというのがその理由である。この「ペリノー王の誓言」の前後を見てみると、ペリノー王も「四福音書の著者にかけて」誓わされているのである（下記③太字部分、及び下線部分）。

③ And there he was made to swere **upon the foure Evangelistes** to telle the trouthe of hys queste frome the one ende to that other.
(*Works* 119 ll.19-21. 下線・太字筆者)

この「ペリノー王の誓言」と前項②「サー・ガウェインの誓言」は、「ペンテ

コステの誓い」の伏線であることは明白である。ペリノー王は「四福音書の著者にかけて冒険談について真実を話すように」と誓わされているのだが、この誓いは同時に場面展開としても機能している点に注目したい。実際はこの「誓言」をもってペリノー王の冒険談は終了し、この後にはペリノー王とグネヴィア王妃のやりとりが続くのである。王妃はペリノー王が乙女の命を助けなかったことを責める。マーリンも王妃に同調し、神は必ず王を罰するとペリノー王の最期を予言する。(Works 119 l.22-120 l.8.)。

以上、「ペリノー王の誓言」も場面展開を誘導するためのものであり、誓いそのものの真偽は全く問題視されていない。また、マーリンの「神は必ず王の行いを罰する」という予言は、「ペンテコステの誓い」へと繋がりを見せている。

2.3 「聖書にかけて (upon a book)」

聖書も四福音書の著者と同様に聖なる表現の代表格である。「聖書に誓って (upon a book)」という「誓言」はマロリーの物語の七カ所で用いられている。以下、それぞれの事例に①～⑦と記号を付した。

「サー・ケイの誓言」

第一編第一章に、その最初の例を見ることができる。サー・エクターの息子のサー・ケイが教会の庭の石に刺さっていたはずの剣を持ち帰る。この剣を抜きとったものは全イングランドの正当な王であることを意味するので、エクターは息子ケイに、剣をどうやって手に入れたのか話すようにと迫る。

① When syre Ector beheld the swerd he retorned ageyne and cam to the chirche, and there they alighte al thre and wente into othe chirche, and anon he made sir Kay to swere upon a book how he came to that swerd.

(Works 14 ll.3-6.下線・太字筆者)

下線部分を文面通りにとらえれば、サー・エクターは剣をどうやって手に入れたのか「聖書にかけて」息子に誓わせたという意味であるが、この「聖書にかけて」という「誓言」も剣を入手した経緯を説明するように促すためのものである。この後アーサーが石から剣を抜く場面へと物語は進行する。

「サー・ガウェイン、サー・ユーウェイン及びサー・マーホールの誓言」

二例目は、第一編第六章でサー・ガウェイン、ユーウェインがマーホールと共に 12 カ月ぶりにアーサー王の宮廷に帰還し、皆に歓迎される場面で見られる。

② Than the kyng made hem to swere **uppon a booke** to telle hym all their adventures that had befalle them that twelve-monthe before, and so they ded. (*Works* 179 ll.19-21.下線・太字筆者)

事例①と同様に、ここでは王がガウェインたちに「聖書にかけて」という「誓言」を用いて「冒険談を話すように」と要求している（引用文②、下線部分）。一例目も二例目も「誓言」が明らかに次の場面展開を後押ししているのである。実際、この後には、サー・マーホールについて少し触れるのみで、Pentecost という表現と共にサー・ペリアスの冒険談へと物語が展開していくのである。

「サー・トリストラムの誓言」

三例目は、第四編第六章に見出される。マーク王は死んだと思っていたトリストラムが生きて目の前にいることを知る。マーク王は自分の妃イゾルトとトリストラムが深く愛し合っていることを知っていたため、彼を深く酷く憎んでいた。その憎しみゆえに彼に死刑の判決を与えようとマーク王は貴族たちを招集するが、家臣の多くはそれに同意しようとしなかった。皆の進言により、トリストラムは死刑を免れ 10 年間の国外追放となる。そしてトリストラムは王と直臣たちの前で「聖書にかけて」誓いを立てるのである（引用文③、下線部分）。

③ and thereuppon he toke hys othe **upon a booke** before the kyng and hys barownys. (*Works* 503 ll.2-4.下線・太字筆者)

この「サー・トリストラムの誓言」は、上記 2.2 の②「サー・ガウェインの誓言」と同じく審問の際の宣誓であり、聖書に言及することで、その法的な効力を強めている。誓いが破られることがあれば、それは死を意味するのである。また、2.3 の①「サー・ケイの誓言」や②「サー・ガウェイン、サー・ユーウェイン及びサー・マーホールの誓言」と同様に、この「サー・トリストラムの誓言」も

次の場面展開への誘導として機能しているのである。実際、「誓言」の直後にトリストラムの国外追放の物語が始まるのである。

「サー・ランスロットの誓言」

四、五例目は、第五編第五章のサー・ランスロットの誓いの中に見ることができる。馬上試合中にサー・ランスロットの槍が運悪くサー・トリストラムの脇腹に突き刺さる。自分はもう死ぬのだと考えたトリストラムは試合場を離れてしまう (*Works* 531 l.30-532 l.7.)。アーサー王はトリストラムを失ったことを非常に残念がったので、ランスロットは王に以下のように誓う。ここでは、ランスロットは二回「聖書にかけて」と誓いを立てる。下記引用④と⑤は連続した文だが、便宜上二分割する。最初の誓いでは彼は 10 人の騎士の 1 人として「聖書にかけて」誓う (下記引用④、下線部後半)。

④ But than sir Launcelot mad brynge forthe a boke, and than seyde sir Launcelot,

'Here we ar ten knyghtes that woll swere upon thys booke never to reste one nyght where we reste another thys twelve-month, untill that we fynde sir Trystram. (*Works* 537 ll.23-27. 下線・太字筆者)

二度目は彼個人としての誓いである。彼は「聖書にかけて」トリストラムを宮廷に連れて帰ることを誓う。そして、「出来なければ死ぬまでです」と断言している (下記引用⑤、下線部分)。

⑤ And as for me,' seyde sir Launcelot, 'I promyse you upon thys booke that, and I may mete with hym, other with fayrenes othir with fowlness I shall brynge hym to thys courte, other elles I shall dye therefore.'

(*Works* 537 ll.27-31. 下線・太字筆者)

審判の場面ではないものの、この「サー・ランスロットの誓言」は 2.2 の②「サー・ガウェインの誓言」や 2.3 の③「サー・トリストラムの誓言」と同じく聖書にかけた宣誓である。

また、ここで注目したいのはランスロットが聖書を用いて誓っている点である(上記引用④、下線部前半)。聖書に手を触れるという行為は、誓いに伴う象徴的動作である。ジャン・クロード・シュミットは『中世の身振り』の中で、ヨーロッパ中世社会で、身振りが象徴的言語としていかに重要であったかについて論じている。⁷シュミットによれば、中世では身振りによって行為に効力が与えられるという。つまり象徴された身振りは、それ自体が法行為を意味しているのである。ランスロットもこの神聖な動作を行うことにより誓いに効力を与え、またその信憑性を立証しようとしたのである。もともと「聖書にかけて (upon a book)」は、「聖書に手をのせて」という意味を含んでいるが、「サー・ランスロットは本を持ってこさせた (sir Launcelot mad brynge forthe a book)」と明文化することにより、彼が聖書に手を触れ誓ったことが強調される。またこの「ランスロットの誓言」は発話文で書かれているので、誓いの効力はより一層増して読み手・聞き手に届くのである。

ランスロットの聖書にかけた誓いは少し先の場面で実現する。ランスロットとトリストラムはマーリンが作った墓石のところで名乗らないまま激しく剣を交えるが、相手のその素晴らしい戦いぶりに感心し名乗り合う。無事再会が叶い、二人は幾度となく口づけし合いその再会を喜ぶのである (*Works* 568 l.32-570 l.2)。

「マーク王の偽誓」

六例目と七例目はマーク王の誓言である。第五編第七章で、ある日アーサー王は「お願いしたことがあるのだが、聞いてくれぬか」とマーク王に切り出す。これに対して、マーク王は「私のできることならなんなりと」と応える (*Works* 608 ll.28-30.)。アーサー王は「有難い (gramercy)」と言いながら本題に入る。王は、サー・トリストラムにとって「良い主人になって欲しい」、そして「わたしのために彼を大事に扱うように」とマーク王に要請する(下記引用、下線部分)。

‘this woll I aske you, that ye be good lorde unto sir Trystram, for he is a man of grete honoure, and that ye woll take hym with you into Cornwayle and lat hym se his fryndis, and there cherysh hym for my sake.’

(*Works* 608 l.31-609 l.2. 下線筆者)

それに対してマーク王はまず以下のように応える。

‘I promyse you be my fayth and by the fayth that I owe unto God and to you, I shall worship hym for youre sake all that I can or may.’

(Works 609 ll.3-5. 下線・太字筆者)

マーク王は「我が身にかけて」誓うだけでなく「神と王にかけて」と誓言するが（上記引用、太字部分）、アーサー王は更に「聖書にかけて」誓って欲しいとマーク王に迫る（下記引用⑥、下線部分）。

⑥ ‘Sir,’ seyde kynge Arthure, ‘and I woll forgyff you all the evyll wyll that ever I ought you, and ye swere that uppon a booke afore me.’

(Works 609 ll.6-8. 下線・太字筆者)

王に促されたマーク王は、アーサー王と騎士たちの前で「聖書にかけて」誓う（下記引用⑦、下線部分）。

⑦ And so he there sware uppon a booke afore hym and all his knyghtes, and therewith kynge Marke and sir Trystram toke ayther othir by the hondis harde knytte togydyrs. (Works 609 ll.10-12. 下線・太字筆者)

⑥とその上二つの引用文は、発話文である。またアーサー王とマーク王のやりとりは声高に読まれれば読まれるほど、「マーク王の誓言」は白々しさを生む。また「聖書にかけて」という「誓言」が「神と王にかけて」の後に位置することにも注目したい。つまり「聖書にかけて」という「誓言」の方が「神と王にかけて」よりも「誓言」としての効力が勝るということである。この二人のやり取りを際立たせるかのように、マーク王が「心を偽っている」こと、そして後にサー・トリストラムを牢に入れ「卑怯にも彼を殺そうとてしまおうした」と説明が続くのである（下記引用、下線部分）。

But for all this kynge Marke thought falsely, as hit preved aftir; for he put sir

Trystram in preson, and cowardly wolde have slayne hym. (*Works* 609 ll.12-15.
下線筆者)

このように、マーク王の誓いは「偽誓」であることが物語中に明記されているのである。この「マーク王の偽誓」も物語を先に推し進める。物語はこの後、マーク王とトリストラムのコーンウォールへの出発の場面へと展開するのである。

Than sone after kynge Marke toke his leve to ryde into Cornwayle, and sir Trystram made hym redy to ryde with hym, (*Works* 609 ll.16-18.)

3. 発話文としての誓いと「偽誓」

そもそもなぜヨーロッパ中世の人々が誓いを重んじたのか。人々が誓いに納得し、それに拘束されたのはなぜか。岩波氏はこの問いに対し、中世の時代が声の文化であることを重視し、中世の社会様式の一環としての誓いについて論じている。つまり、誓いは声に出さないと無効なのである。声が小さければ誓いの力を最大限に発揮することはできないので「言わぬは言うに勝る」という概念は通用しない。ヨーロッパ中世では「雄弁は金」なのである。

では、誓いが物語に果たしている役割とは何か。前項ではマーク王の「偽誓」について述べたが、岩波氏によれば「偽誓には嘘と知っていて証言すること（偽証）も、あるいは意図せず嘘を言ってしまったもの」⁸も含まれたという。マーク王が意図的に「偽誓」をしているのは明らかであるが、彼のアーサー王に対する「偽誓」には伏線がある。マーク王は前の場面でサー・ガヘリスに対しても、以下のように嘘の誓いを立てている。

And therewithal kynge Marke yelded hym unto sir Gaherys, and than he kneled adowne and made hys othe upon the crosse of the swerde that never whyle he lyved he wolde be ayenste arraunte knyghtes. And also he sware to be good fryende unto sir Trystram, if ever he cam into Cornwayle. (*Works* 549 ll.21-26.)

ここは「生きている限り武者修行中の騎士たちと敵対しない」とマーク王が

「聖なる剣の十字架にかけて」誓っている場面である（上記引用文、下線部前半）。続いて、サー・トリストラムと友となることも誓うのだが、ここでは「誓言」は省略し「良い友となることを誓う」という表現に留めていることに気づく（上記引用文、下線部後半）。剣も聖書と同じく聖なるものの印であり、また既に述べたように、聖なるものにかけた誓いには強い法的効力があることは認知されていた。なので、マーク王がこの場で「誓言」を省略したことに当時の読み手（聴衆）は気づいたに違いないし、そこにマーク王の意図的なものを感じ取ったはずである。このようにして、このマーク王のガヘリスに向けた「偽誓」は、後の場面の伏線としての効果を生みだしている。

上記の2.3の⑥と⑦の用例で述べたように、アーサー王はマーク王に対して「良い主人になって欲しい」、「私のために彼を大事に扱うように」と要求している。これに対してマーク王は「我が身にかけて、また神とアーサー王にかけて (be my fayth and by the fayth that I owe unto God and to you)」と応えている。このマーク王の返答に対し、アーサー王は「聖書にかけて誓うように (ye swere that uppon a booke afore me)」と促すのである。二人のやり取りから、アーサー王がマーク王の発言を全く信用していないのは明らかであるが、興味深いのは二人のやり取りが物語の中で発話文として描かれている点である。誓いは発話することによりその効力を持つが、物語の中でも発話文として表現された方が効果的であることは明白である。では、発話された「偽誓」はどのような効果を生むのだろうか。

マーク王の二つの「偽誓」の前後には、マーク王が信用ならない人物であることが繰り返し述べられている。中でも圧巻なのがサー・ラメラックの発言である。ラメラックは本人を前にして「この世で最も恥ずべき騎士 (the shamfullist knight of a kynge)」、「全ての騎士にとって敵である王 (a grete enemy to all good knyghtes)」、「卑怯で不実な王 (false kynge cowarde)」、「世界中が王を非難している (all the wor[r]lde of hym spekyth shame)」と言い放つ (*Works* 580 ll.2-12.)。これらは全て発話文であるからその言葉の力は絶大である。また、このラメラックの台詞はマーク王の二つの「偽誓」の間に挟まれているから、マーク王の誓いの場面になればそれが「偽誓」であることに読者（聴衆）は容易に気づくだろう。マーク王が「神の名において」、「聖書にかけて」と声高に誓えば誓うほどその言葉は偽善さを増すのだが、同時にその信憑性が欠ければ欠けるほど

「マーク王の偽誓」が物語に付与する効果も増すのである。

4. 声の文化における物語の形成と「誓言」

野原氏は、チョーサー (Geoffrey Chaucer 1343?-1400) の『カンタベリー物語』 *Canterbury Tales* では、身分の高いものや教養のあるものは誓いを避ける傾向にあると指摘している。その例として The General Prologue の女子修道院長の madame Eglentyne についての言及や誓いを罪惡視する例として教区牧師の発言を引用している。『カンタベリー物語』が書かれたのはチョーサーの晩年 14 年間ぐらいの間と言われており、マロリーのアーサー王物語が完成した年代と非常に近いが、マロリーの物語に誓いが多数登場するのは本稿の冒頭で述べたとおりである。では、誓いはマロリーの作品中どのように機能しているのか。

既に 2.2 から 2.3 で論じたが、「四福音著者にかけて」や「聖書にかけて」などの聖なる言葉に言及する「誓言」は場面展開の役割を担っているようである。「誓言」がなぜこのような機能を持つようになったのか。「誓言」は音声化された言葉であるということと、アーサー王の物語がもともととは声によって語られ継承された作品であることが一因ではないか。音声化された言葉は記憶の共有を促すのである。声の文化では、同じ物語でも語る場所や相手が変わるごとに、当然その内容は少しずつ変化する。W. J. オングは『声の文化と文字の文化』⁹の中でミリアム・パリーの『イリアス』と『オデュッセイア』の研究¹⁰に言及しながら、声の文化に特有な記憶形成について論じている。パリーの主張で興味深いのは、決まり文句が叙事詩の構成を導いているということと、きまり文句は無数に存在し、話の筋をそこなわずにいれかえ自在であるとする点である。決まり文句を思い出し、それらに頼れば物語を何度でも再現できるのである。つまり決まり文句が物語の構成を導くというわけである。また、オングはロードのユーゴスラヴィアの吟遊詩人の研究を紹介している。¹¹ ロードは同一の吟遊詩人が同じ歌を歌う様子を録音し比較した。その結果、彼らは同じテーマを同じ決まり文句を用いて歌うが、同じ歌が二度と同じやり方で歌われることはなかったのである。声の文化での創造性とは、「伝統的な材料を、その都度一度しかない状況や聴衆に効果的にあわせる」ことなのである。¹²

オングの紹介したパリーやロードの研究と声の文化についての見解は、マロリ

ーのアーサー王物語の構成と「誓言」の関係を解くカギを示しているのではない。誓うという行為は声に依存しているが、誓いは単純な登場人物同士の発話行為ではない。誓いは発話よりも派手なアクションであり、登場人物同士だけでなく聴衆（読者）にも向けられて行われる仕掛けである。誓いがアクションならば、それを導く「誓言」は、次のアクションをも導く。このように物語の発達過程で「誓言」は物語の導き手として継承され、また進化していったに違いない。

5. 「ペンテコステの誓い」と聖霊降臨祭 (Pentecost)

2.1 で述べたように、「ペンテコステの誓い」はアーサー王と円卓の騎士たちにとって「憲章」であると同時に彼らの結束と国の社会秩序を守るための契約であり、マロリーの物語の比較的早い部分で登場する (*Works* 120)。物語を読み進んでいくと Pentecost という語が単独で何度も登場することに気づく。以下に Pentecost という言葉の持つ意味、及び「ペンテコステの誓い」の役割について考察したい。

Pentecost という言葉は、聖霊降臨祭のキリスト教徒たちの「集い」を意味するのと同時に登場人物の「集い」も意味する。マロリーの物語には Pentecost や Pentecoste という綴りで合計 27 回登場する。アーサーが王位継承権を意味する教会の剣を抜いたことを知り、まず貴族たちは 12 日節 (Twelfth Day) に集まる。しかし、彼らはアーサーを君主として仰ぐことに反対し、聖燭祭 (Candlemas) に集い直す。しかしここでもアーサーを認めずに、集いを復活祭 (Easter) まで延期する。しかし、復活祭でもアーサーは認められない。そして集いは聖霊降臨祭 (Pentecost) まで延期される。三度の延期を経て、四度目の集いの場で、アーサーは貴族たちと平民の目の前で剣を引き抜きやっと王として認められるのである (*Works* 15-16)。このように Pentecost の前に三度集いがあるが、いずれもキリスト教の祝日であり集いの日である。しかし、マロリーはもともと Pentecost が物語の重要な場面での集いの日として使われていることに注目し、「円卓の騎士たちの誓い」という重要な役割を付与したのだろう。

次に「ペンテコステの誓い」の別の役割にも注目したい。「ペンテコステの誓い」は物語の節目に配置されているのである。本論の 2.1 を振り返ってみたい。「ペンテコステの誓い」はマロリーの第一編三章の終盤に描かれてるが、この

後には物語の区切りを示すコロフォンが続く。

EXPLICIT THE WEDDYNG OF KING ARTHUR. (*Works* 120 l.28.)

つまり「ペンテコステの誓い」の場面は、2.2 で論じた「サー・ガウェインの誓言」と同様に、コロフォンと共に場面の幕を引く役目を担っているのである。このあと場面はマーリンの物語へと変わるのである。

さらに注目に値するのは、Pentecost という言葉自体にも場面展開の役割が与えられていることである。例えば、第六編第一章の冒頭は「聖霊降臨祭の前夜 (the vigyl of Pentecoste)」という出だしで始まっているのである。Pentecost という言葉と共にアーサー王と円卓の騎士たちが集いはじめる。そこに馬に乗った美しい婦人が登場し物語が始まるのである (*Works* 854 ll.1-6.)。翌日、聖霊降臨祭の夕方に雷が鳴り響くと光が差し込んで大広間に聖杯が入ってくる。白い絹で覆われているために聖杯は誰の目にも見えなかった。この後ガウェインを筆頭に次の日聖杯探求に出かけることを誓うのである (*Works* 865 l.17-866 l.16)。このように「聖杯物語」の中でも Pentecost という言葉で物語が始まり、またこの言葉によって聖杯探求の物語が動き始めているのがわかる。このように、Pentecost という言葉自体が物語を動かす役目を担っているのである。

6. 結論

以上、マロリーの物語の「ペンタコステの誓い (the Pentecostal Oath)」と「四福音書の著者 (four Evangelists)」や「聖書 (a book)」の名を語る「誓言」について考察を試みた。誓うという行為は契約であるが、音声をともなって初めてその法的効力を発揮する。Pentecost という言葉と騎士たちの誓いが結びついたのは中世が声の文化であったことも一因だろう。誓いとその社会の中で機能し得たその裏には誓いには排除の力があったからである。アーサー王物語は声の文化のなかで、声によって継承され続けた。「ペンテコステの誓い」は円卓の騎士たちの「憲章」であり、騎士たちは毎年ペンテコステに宮廷に集い、その誓いを声にだして誓うことで法的効力は維持され王国の秩序は守られた。誓いを破れば死を意味したし、時には社会的に排除された。所属社会からの排除は死刑と同等

の罰である。

また誓いは別の形でアーサー王物語の生成過程に寄与したと考えられる。「ペンテコステの誓い」は王国の秩序だけでなく、物語の構成を導きその継承を維持した。「聖書」と「四福音書の著者」の名を語る「誓言」も、Pentecostという言葉も他に無数にあったと考えられる決まり文句の一部であろう。しかし、アーサー王物語が声の文化の中で育まれた物語であることを踏まえると、誓いが物語の生成過程に影響を与えた可能性は高く、考慮する価値は十分あるのではないだろうか。

- ¹ 野原康弘「旅籠 Tabard の主人の「誓言」：Chaucer 時代のロンドン市民 Herry Bailly の場合」『桃山学院大学キリスト教論集』第 45 号 2010, p.97-135.
- ² 2007 年度国際アーサー王学会日本支部で、小宮真樹子氏が「誓約と偽証：マロリーにおける performative language」というテーマで研究発表を行っている。小宮氏は「ペンテコステの誓い」がアーサーの社会においてどのような役割を果たしているかを分析したうえで、誓いがうわべだけの偽証となり、嘘と暴力が蔓延した結果、円卓騎士団の崩壊が生じたことを検証している。
- ³ 本論文では、マロリーのテキストは以下を使用し括弧内にページ数を記した。*The Works of Sir Thomas Malory*, ed. by Eugene Vinaver, rev. by P.J.C. Filed, 3rd ed., 3 vols. (Oxford: Clarendon, 1990) . 和訳は以下の翻訳本を参考にした。中島邦夫・小川睦子・遠藤幸子訳『完訳アーサー王物語』（青山社、1995 年）。
- ⁴ この「ペンテコステの誓い」の部分は、マロリーの手によって追加されたものである。Vinaver, p.1335.
- ⁵ 岩波敦子『誓いの精神史』（講談社、2007 年）。
- ⁶ 福音書とはイエスの言行録である。四福音書の著者とは新約聖書におさめられた四つの福音書の著者のことである。マタイ（Matthew）、マルコ（Mark）、ルカ（Luke）、ヨハネ（John）の 4 人である。
- ⁷ ジャン＝クロード・シュミット『中世の身振り』松村剛訳（みすず書房、1996 年）、p.12.

⁸ 岩波、p.100.

⁹ W.J. オング『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳（藤原書店、1991 年）

¹⁰ Milman Parry, *The Making of Homeric Verse: The Collected Papers of Milman Parry*, ed. [his son] Adam Parry (Oxford: Clarendon Press) .

¹¹ Albert B. Lord, *The Singer of Tales*, Harvard Studies in Comparative Literature, 24 (Cambridge, Mass.: Harvard University Press) .

¹² オング、p.129.